武蔵野日曜聖書講筵

パウロのコリント伝道　パウロとアポロ
――使徒行伝第18章1節～19章7節――

１９９１年11月3日
小池辰雄

コリント伝道　パウロかアポロか　告白か解説か　「の中から」か「について」か　聖霊か十字架止まりか　聖霊を受けしか？

【使徒18】

1この後パウロ、アテネを離れてコリントに到り、2アクラと云うポントに生まれたるユダヤ人に遇う。クラウデオ、ユダヤ人にことごとくロマを退くべき命を下したるによりて、近頃その妻プリスキラと共にイタリヤより来りし者なり。3パウロ其の許に到りしに、同業なりしかば偕に居りて工をなせり。彼らの業は幕屋製造なり。4斯て安息日毎に会堂にて論じ、ユダヤ人とギリシヤ人とを勧む。

5シラスとテモテとマケドニヤより来りて後はパウロ専ら御言を宣ぶることに力め、イエスのキリストたることをユダヤ人に証せり6然るに、彼ら之に逆い、かつ罵りたれば、パウロ衣を払いて言う『なんじらの血は汝らの首に帰すべし、我は潔よし、今より異邦人に往かん』7遂に此処を去りて神を敬うテテオ・ユストと云う人の家に到る。この家は会堂に隣れり。8会堂司クリスポその家族一同と共に主を信じ、また多くのコリント人も聴きて信じ、かつバプテスマを受けたり。9主は夜まぼろしの中にパウロに言い給う『おそるな、語れ、黙すな、10我なんじと偕にあり、誰をも汝を攻めて害う者なからん。此の町には多くの我が民あり』11斯てパウロ一年六个月ここに留まりて神の言を教えたり。

12ガリオ、アカヤの総督たる時、ユダヤ人、心を一つにしてパウロを攻め、審判の座に曳きゆき、13『この人は律法にかなわぬ仕方にて神を拝むことを人に勧む』と言いたれば、14パウロ口を開かんとせしに、ガリオ、ユダヤ人に言う『ユダヤ人よ、不正または奸悪の事ならば、我が汝らに聴くは道理なれど、15もし言、名あるいは汝らの律法にかかわる問題ならば、汝等みずから理むべし。我かかる事の審判人となるを好まず』16斯て彼らを審判の座より逐いいだす。17ここに人々みな会堂司ソステネを執え、審判の座の前にて

打ちたたきたり。ガリオは凡て此らの事を意とせざりき。
18パウロなお久しく留まりてのち、兄弟たちに別れを告げ、プリスキラとアクラを伴い、シリヤに向かいて船出す。早くより誓願ありたれば、ケンクレヤにて髪を剃れり。19斯てエペソに著き、其処にこの二人を留めおき、自らは会堂に入りてユダヤ人と論ず。20人々かれに今暫く居らんことを請いたれど、肯んせずして、21別れをつげ『神の御意ならば復なんじらに返らん』と言いてエペソより船出し、22カイザリヤにつき、而してエルサレムに上り、教会の安否を問いてアンテオケに下り、23此処に暫く留まりて後また去りてガラテヤ、フルギヤの地を次々に経て凡ての弟子を堅うせり。
24時にアレキサンドリヤ生まれのユダヤ人にて聖書に通達したるアポロと云う能弁なる者エペソに下る。25この人はさきに主の道を教えられ、ただヨハネのバプテスマを知るのみなれど、熱心にして詳細にイエスの事を語り、かつ教えたり。26かれ会堂にて臆せずして語り始めしを、プリスキラとアクラと聞きいて之を迎え入れ、なおも詳細に神の道を解き明かせり。27アポロ遂にアカヤに渡らんと為たれば、兄弟たち之を励まし、かつ弟子たちに彼を受け容るるように書き贈れり。彼かしこに往き、既に恩恵によりて信じたる者に多くの益を与う。28即ち聖書に基き、イエスのキリストたる事を示して、激甚くかつ公然にユダヤ人を言い伏せたるなり。

【使徒19】
1斯てアポロ、コリントに居りし時、パウロ東の地方を経てエペソに到り、或る弟子たちに逢いて、2『なんじら信者となりしとき聖霊を受けしか』と言いたれば、彼等いう『いな、我らは聖霊の有ることすら聞かず』3パウロ言う『されば何によりてバプテスマを受けしか』彼等いう『ヨハネのバプテスマなり』4パウロ言う『ヨハネは悔改のバプテスマを授けて己に後れて来るもの（即ちイエス）を信ずべきことを民に云えるなり』5彼等これを聞きて主イエスの名によりてバプテスマを受く。6パウロ手を彼らの上に按きしとき、聖霊その上に臨みたれば、彼ら異言を語り、かつ預言せり、7この人々は凡て十二人ほどなり。……

●コリント伝道

今日は、パウロのコリント伝道のところ、大事なところです。パウロは、第二次伝道では、アンテオケから出発して、自分の故郷のタルソを通って、それから、第一次伝道で来たデルベ、ルステラ、イコニオム、アンテオケを通って、北の方へ行こうと思ったら、

「行ってはいかん」

ということでもって、ずっと西の方へ行く。そして、トロアスから船でネアポリスへ。それからピリピ伝道。ルデヤというのはこのピリピです。それから、アンピポリス、アポロニアを通ってテサロニケへ行く。ここでは、なかなかいい信徒がたくさんできた。それから、ベレアを通ってずっと南下します。そして、アテネへ来た。アテネで、有名なアレオパゴスの演説をやった。それから、コリント地峡を渡って、海峡の対岸にコリントがある。有名な商業中心の都市です。文化的な中心はアテネ、商業的な中心がこのコリント、ちょうど、東京と大阪みたいなものです。そのコリントの伝道です。

18章です。

1この後パウロ、アテネを離れてコリントに到り、2アクラと云うポントに生まれたるユダヤ人に遇う。

「アクラ」は、いつまでも大事な人物です。

クラウデオ、ユダヤ人にことごとくロマを退くべき命を下したるによりて、

「クラウデオ」はローマの皇帝です。ユダヤ教はけしからんと。これは、どこまでも皇帝崇拝ですから、威張っているわけです。偶像みたいな神さまですけれども。「ロマを退くべき命を下した」、これは何年であるかははっきりしません。

近頃その妻プリスキラと共にイタリヤより来りし者なり。

「プリスキラ」というのは、「アクラ」と違って、ギリシヤ系です。

3パウロ其の許に到りしに、同業なりしかば偕に居りて工(わざ)をなせり。彼らの業は幕屋製造(つくり)なり。

「同業」というのは、アクラというのが幕屋づくりで、パウロは幕屋を造っていましたから、幕屋造りを一緒にやったということ。パウロが幕屋を造っていたというのは、実に面白いですね。私は

「幕屋」

ということを言いだしたんだけれども。聖書の創世記から黙示録まで、要するに、神さまの歴史は幕屋を張りながら旅をしているような歴史ですから。実は、神殿宗教は静止してしまうから、これは宗教形態としては本当は、よくないんです、お寺だとか、神殿だとかはね。動いているのがいい。パウロは、幕屋造りをしながら、しょっちゅう動いている。そして、動き終わった時には、殉教の死ということです。

4斯て安息日毎に会堂にて論じ、ユダヤ人とギリシヤ人とを勧(すす)む。

非常に、パウロは、霊的な素質と、論ずることのできる理性的なものと、両方兼ねそなえていますから。感情の世界も深いし。とにかく、素晴らしい人物です。だから、哲学的なことも分かっているから、論じようとしたって、いくらでも論ぜる。だから、書翰も、非常に哲学的な構造も持っている。ことにローマ書は。しかし、それが、神学になるんですけれども、霊が中心ですから、生きた神学で、いわゆる学問としての神学ではない。

だから、彼らは議論しても、本当はパウロにはかなわないんです。パウロは決して議論倒れなんかしてはいない。御霊中心ですから。み霊の論理ですから。

5 **シラスとテモテとマケドニヤより来りて後はパウロ専ら御言を宣ぶることに力め、イエスのキリストたることをユダヤ人に証せり。**

すると、すぐまたユダヤ人は反対するんだ。イエスが救主であることを。

「十字架にかかった者がなぜ救主であるか」

なんてなわけでね。とにかく、イザヤ書53章をキリストが身をもって証したのに、それが分からないものだから、困ったものだ。

「いったい、ユダヤ人はどういう心でもってイザヤ書を読んでいるか」

と私は今でもいくらでも言いたいくらいです。

6 **然るに、彼ら之に逆い、かつ罵りたれば、パウロ衣を払いて言う『なんじらの血は汝らの首に帰すべし、我は潔よし、今より異邦人に往かん』**

「もし、血を流すようなことをしたら、それはお前達の所に戻ってくるぞ」

と、この言葉はエレミヤが言った言葉です。

「自分を殺したってダメだぞ」

というわけです。

「もう、お前たちは相手にならん。自分は今から異邦人へ行こう」

と、パウロも諦めた。もともと、異邦伝道の使命を持っていた。しかしながら、どこまでも、ユダヤ人に会えば、このユダヤ人を何とかしてひっくり返そうと――自分がひっくり返ったんですから、最初にひっくり返ったのはパウロだから――体験からものを言っている。

7 **遂に此処を去りて神を敬うテテオ・ユストと云う人の家に到る。**

注解書は、多分この人はローマ系の人だろうと、言っているわけです。

この家は会堂に隣れり。 8 **会堂司クリスポその家族一同と共に主を信じ、また多くのコリント人も聴きて信じ、かつバプテスマを受けたり。**

もちろん、パウロからバプテスマを受けたのは、聖霊のバプテスマです。

9 **主は夜まぼろしの中にパウロに言い給う『おそるな、語れ、黙すな、** 10 **我なんじと偕にあり、誰をも汝を攻めて害う者なからん。此の町には多くの我が民あり』** 11 **斯てパウロ一年六个月ここに留まりて神の言を教えたり。**

そういう示しを受けた。そこで、パウロはそれから一年半とどまって、大いに伝道したわけです。随分長いね、一年半もコリントにはいた。コリントは、また非常にこの世的に乱れた町です。

12 **ガリオ、アカヤの総督たる時、**

「アカヤ」というのは、コリントの在る半島です。この総督。

ユダヤ人、心を一つにしてパウロを攻め、審判の座に曳きゆき、 13 **『この人**

は律法にかなわぬ仕方にて神を拝むことを人に勧む』と言いたれば、
まぁ、ユダヤ人の言いそうなことです。あいかわらず、食いついて来たんだね、これ。
14 **パウロ口を開かんとせしに、ガリオ、ユダヤ人に言う『ユダヤ人よ、不正または奸悪の事ならば、我が汝らに聴くは道理なれど、15もし言、名あるいは汝らの律法にかかわる問題ならば、汝等みずから理むべし。我かかる事の審判人となるを好まず』**
「不正や奸悪の事ならば、いくらでも聴いてやるけれども、しかし、お前達の律法の問題ならば、自分はそんな事には関係がない。お前達が勝手にやれ」
と、そう言った。
16 **斯て彼らを審判の座より逐いいだす。17ここに人々みな会堂司ソステネを執え、審判の座の前にて打ちたたきたり。ガリオは凡て此らの事を意とせざりき。**
そんな事を問題にしなかった。
18 **パウロなお久しく留まりてのち、兄弟たちに別れを告げ、プリスキラとアクラを伴い、**
プリスキラの方が先に書いてあるね、妻の方が。
シリヤに向かいて船出す。早くより誓願ありたれば、ケンクレヤにて髪を剃れり。19斯てエペソに著き、其処にこの二人を留めおき、自らは会堂に入りてユダヤ人と論ず。20人々かれに今暫く居らんことを請いたれど、肯んせずして、21別れをつげ『神の御意ならば復なんじらに返らん』と言いてエペソより船出し、22カイザリヤにつき、而してエルサレムに上り、教会の安否を問いてアンテオケに下り、23此処に暫く留まりて後また去りてガラテヤ、フルギヤの地を次々に経て凡ての弟子を堅うせり。
初め伝道した所が気になるものだから、また行って弟子を堅うした。第一次伝道をした所がガラテヤ地方ですから、ガラテヤ書というのはそのことなんです。

●パウロかアポロか

24 **時にアレキサンドリヤ生まれのユダヤ人にて聖書に通達したるアポロと云う能弁なる者エペソに下る。**
エジプトのアレキサンドリヤです。だから、アポロはギリシヤ語の旧約聖書を読んでいたんだな。能弁なんだ。エペソにやって来た。
25 **この人はさきに主の道を教えられ、ただヨハネのバプテスマを知るのみなれど、熱心にして詳細にイエスの事を語り、かつ教えたり。**
よく研究し勉強するんだ、一般の教会、無教会のクリスチャンみたいにね。あなた方が勉強しない、というんじゃないよ。

26 **かれ会堂にて臆せずして語り始めしを、プリスキラとアクラと聞きいて之を迎え入れ、なおも詳細(つまびらか)に神の道を解き明かせり。**

アクラというのはテントを造っているんで、奥さんの方が、知的には、また信仰的にも少し上とみえて、それで、プリスキラの方が先に書いてある。この二人も聞いていたんだ。エペソにパウロよりか先に行っていたからね。

27 **アポロ遂にアカヤに渡らんと為(し)たれば、兄弟たち之を励まし、かつ弟子たちに彼を受け容(い)るるように書き贈れり。彼かしこに往き、既に恩恵(めぐみ)によりて信じたる者に多くの益を与う。**

パウロの伝道による恩恵だね。エペソからまたアカヤへ出掛けて行った。

28 **即ち聖書に基き、イエスのキリストたる事を示して、激甚(ていた)くかつ公然(おおやけ)にユダヤ人を言い伏せたるなり。**

なかなか大したもんだね。ユダヤ人を言いふせた。能弁なんだ。この能弁に負けてしまうんだ。

19章です。

1 **斯(かく)てアポロ、コリントに居りし時、パウロ東の地方を経てエペソに到り、或る弟子たちに逢いて、2『なんじら信者となりしとき聖霊を受けしか』と言いたれば、**

「アポロでもって信者となったが聖霊を受けたか」

というわけだ。

彼等いう『いな、我らは聖霊の有ることすら聞かず』3パウロ言う『されば何によりてバプテスマを受けしか』彼等いう『ヨハネのバプテスマなり』

洗礼のヨハネの「水のバプテスマ」、「悔改のバプテスマ」。

「自分たちは間違っていた」

と言って、神さまの前に帰りゆく、魂の回心だ。

4 **パウロ言う『ヨハネは悔改(くいあらため)のバプテスマを授けて己に後(おく)れて来るもの（即ちイエス）を信ずべきことを民に云えるなり』**

パウロが言うのに、ヨハネは悔改のバプテスマを授けて、自分から後にやって来る者キリスト即ちイエスが救主であることを信ずべきことを民に言ったのに、

彼等これを聞きて主イエスの名によりてバプテスマを受く。

「名によりて」という言い方はちょっと困る。主イエスの

「名の中へと」

です。「名の中へ」とバプテスマを受く。バプテスマを受けて、主イエスの名と一つになることです。こういう言い方は「名によりて」よりも目的を持って強いんです。手段、方法ではない。

「エイス　ト　オノマ　トゥー　キュリウー　イエスー」
「主イエスの名の中へと」
バプテスマの目的は、イエスの中に入ること。もちろん、聖名を呼びながらバプテスマをするんですが、名の中へ入らなければしょうがない。
「イントゥー　ザ　ネイム　オブ　ザ　ロード　ジーザス」
なんです。

6 **パウロ手を彼らの上に按(お)きしとき、聖霊その上に臨みたれば、彼ら異言を語り、かつ預言せり、7 この人々は凡て十二人ほどなり。**

「十二人ほど」というのは、「十二人くらい」と書いてある。
「パウロとアポロ」ということ。我々はパウロ型なんです。ところが、無教会、一般の教会は、アポロなんです。パウロ型とアポロ型。ということは、聖霊が来ているか、来てないか。聖霊を受けとっているかいないか。

●告白か解説か

私は、内村先生や藤井先生の事は相当詳しく知っています。素晴らしいんだ、この二人の先生は特に。その在り方に於ては――申し分ないとは言いませんけれども――とにかく凄いんです。しかし、十字架一点張りでね。そして、先生方は喧嘩しても――内村先生は、大体、弟子とは必ず一遍くらいは問題を起こしている。そして、解決は何によるかというと、十字架に下に立つ、お互いに――そして互いに許す。それが、無教会のまたいい姿なんですけれども。十字架で許された者が、相手を許すことのできないことはない。十字架というのは、我々の徹底的な赦しですからね。
「十字架の赦しを受けながら、人を許すことができないのは、本当は十字架を受けとってない」
ということになる。せっかく許しているのに、また、その許しを受けとらないのがいる。そういうパリサイがいる。困ったもんだね、これ。私もそういうのを経験していますから。
ところが、十字架は、そういった大事な面を持っていますけれども、積極的に本当に荷なって愛していくというその力、それは聖霊が持っている。相手を変化させる力を持っている。しかし、変化させる力があるのに、それをもなお拒む者は、もうサタンにくみしているんだから、これは仕方がない。物理法則ではないから。
福音の世界は、医学的説明をしようが、科学的説明をしようが、どの角度の説明をしようが、説明は説明なんです。
「その世界に入る、そこに生きる」
ということは、また、それとは別問題なんです。
「説明が分かったから、私は分かりました」

ではない。そういうことで、私は、或る人に言ったんだ。絵の人だ。一生懸命に解説する。解説は解説ですよ。しかし、解説と描く事とは別なんだ。何も解説しなくても、描く人は本当の世界にいる。解説して絵が分かったという世界は、ただ

「分かった」

だけのはなし。

「そこに生きる」

ということは、解説の世界ではないんです。

聖書も、私はただ解説しているのではない。そこの中からものを言っているだけのはなし。その点では、藤井先生も内村先生も、聖書の解説者ではない。心の世界で、魂の世界で受けとって、それを告白している。そこで、力があるんです、藤井先生も内村先生も。けれども、塚本先生となると、これは非常に研究家です。だから、塚本先生のは、そういう意味において、非常に解説の面が強い。それでも、最後は信仰でもってものを言うから、最後は、先生はもちろんいいところに来ていますけれども、結局、解説です。だから、塚本先生の弟子たちは学者になる。学者になるけれども、本当の意味の伝道者とはまた質が違ってくる。

ゲーテの『ファウスト』をどんなに解説したって、本当に『ファウスト』を味読することとは違うんです。ゲーテが、

「そういった学者的な解説の世界は二段構えの世界だ、第一段の世界はそうじゃない、生命そのものの現象の世界だ」

と言っている。

そういうことで、要するに、生きること自身が福音の告白でなければならない。それは、口をもって、或は手足をもって。そういうのが「証する」ということ。

●「の中から」か「について」か

アポロは要するに解説者なんです、聖霊がないから。聖霊がないと、結局、解説の世界なんですよ。「について」語っているんです。「の中から」ものを言うことは――これは十字架だけでも、ある程度言えますけれども――本当に聖霊が来なければこれは言えない。パウロがロマ書の7章で、

「この死の体（からだ）より我を救わん者は誰ぞや」

と言って、絶叫しているが、

「イエス・キリストの故に」

といって始まった8章は完全に聖霊の世界です。私はロマ書8章を「聖霊の凱歌」と言います。「復活の凱歌」はコリント前書15章。「愛の凱歌」はコリント前書13章です。

だから、せっかくだけれども、内村先生、藤井先生は素晴らしいんだけれども、

「汝ら、一つのものを欠く」

と、キリストに言われる。聖霊が全然ない、とは言いませんよ。けれども、み霊の積極的な力を本当に、

「聖霊こそは」

と、内村先生も藤井先生も塚本先生も、無教会の先生方は、それだけはっきりものが言えなかったということは結局、体験していなかったということ。先生方はそれぞれの役割を果たされた。ケチを付けるんじゃない。無教会は前進しなくてはダメなんだ。手島郁郎と私は前進した。前進せしめられた。そうすると、

「あれは無教会からズレた」

と言って、アウトサイダーにした、異端視した。「異端」とまでは言わないでしょうけれども。

「ああ、結構でございます」

と、私たちは使徒達の次元の中に入って来たんだから、何と言われようと、痛くもかゆくもない。

いいね、皆さんはそれだけの自覚を持ってくださいよ。み霊の世界というのは、聖書を読んでいて、直ちに読むことが祈りであり、力とならなければ、本当は読んでいるとはいえない。これぱっかりは、誰が何といおうと、絶対にゆずることができない。

それだけの迫力をもって、内村鑑三も藤井武も言ってはいないんです、残念ながら。先生方の文字は素晴らしいんだけれども、残念ながら。まぁしかし、本当に、先生方は、いきました。十字架でいきました。その点では、立派なものです。「立派」と言ったって人間的な立派さじゃないですよ。藤井先生のものを読んでいても、人間的には、

「私は罪びとの首(かしら)だ、しょうがないやつだ」

と、彼も言っている。藤井先生も道徳との戦いがあった。だけれども、

「道徳との戦いをいくらやっても、いよいよダメなことが分かった。もう俺はやめた。もう十字架だけだ」

とはっきり告白しています。

マルチン・ルターだってそうなんだ。どうにもならんと。勤行をやったけれども、ひとつも福音を本当に喜ばない。苦しくてしょがないと、ぶっ倒れてしまった。とにかく、宗教の世界では、その関門を通らなければ、本当の世界に入れない。自分に愛想をつかすまでは。

「こんな野郎は」

と言って、自分を吐き捨てるようなことに、一遍ならなければ、本当の世界に入れない。女の方には、私は必ずしも言いませんよ。女の方は割合にスッと入れるから。男はダメなんだよな、我が強いから。

女性で魂のいいことが非常に大事なことなんです。第二の国民をつくる者は女性ですか

らね、お母さんですから。結婚しようがしまいが、母たる存在なんです。歴史を動かしているのは、実は女性なんだ。見えざる力だ。だから、女子教育は非常に大事なんだが、今は、それだけの自覚をもって女子教育をしている人が果たして何人いるか、というわけだ。

●聖霊か十字架止まりか

アポロ的な信仰がかくの如きものである、と。パウロとはおよそ違う。これははっきりしている。使徒行伝の19章は、始めの7節まで、アポロなんていうインテリ・クリスチャンが出てきて、ちょうどよかったよ。これはインテリ・クリスチャンだ。どんなに素晴らしいインテリであっても――パウロはそうだよ――そんなものは塵芥の如く思って、今度は、この聖霊で、塵芥の如く捨てていたインテリ性が、パウロでは逆に生きてきた。

「十字架される」

ということは、そういうことなんです。生まれつきの我々の有っているものは、みんな賜りたるもので、結構なんです。どんな、理性も感性も悟性も、魂の霊性も。だけれども、生まれつきのそういうものはみな結構なものだけれども――神さまがくれたんだからさ、いろんな衝動もある。全部、それ自身はひとつも悪くはない。何か物を欲しがったって、これは神さまから来た衝動の一つなんだ――それをいっぺん投げ捨てる。しょうがないんだ、神さまからいただいたものを私してしまうんだから。みんないただいたものは、本当は預かっているんだ。預かって、いただいているものを、私することが「罪」というわけだ。自己本位に使いだした。これが罪というやつ。神本位に使わない。

神さまのものなんだ。神本位にできないところに、キリストの十字架が来て、

「その自己本位は、全部、私が引き受けて、ご破算にしたから心配するな。この十字架をしっかり受けとれ。そうしたら、神本位にひっくり返ってくるぞ。」

と。神本位に本当になるためには、そこに上からの力が来なければならない。それが聖霊なんだから。とうてい、聖霊がなければ、そうならない。「十字架」でみんな喜んでいるんだよな、無教会は。悪くはないよ、偽りでもない。私もそれを経験してきた。

「何か欠けているなぁ。信仰、信仰というけれども、なんだか本当の力が来ない」

と。けれども、これをひっくり返されて、聖霊が来たから、「なるほど、これは」ということになった。

まぁ、あなた方、内村先生や何かを読んでごらん。単なる頭の本でないから、大事な本なんだ。内村先生も藤井先生も力があるよ。けれども、どうしても欠けているものがある。この聖霊です。それがはっきり見えるのは、御霊が来たからです。昔、内村先生の『ロマ書』は、素晴らしいなぁと思って私は読んでいた。今、読むと、やっぱりそこが欠けている。皆さん、私のものを本当に読んでごらん。そして比較してごらん。

「なるほど、違うなぁ」

とお分かりなるはずです。私は自分で自分の書いたものを読んでも、力がくるんだ。上からのもので書いているから。

●聖霊を受けしか？

そういうことで、アポロ的なクリスチャンが一杯なんだ、特に都会には。どこまでも、パウロ、ヨハネ、ペテロ。特にパウロは代表者ですけれども。

神さまの世界に本当に入って、聖霊の現実に入るところが「義」の世界なんです。

「今は、お前たちは見えない。けれども、今に、見える時がくるぞ」

と。パウロの書翰の中に、「甦りて義とせられる」と書いてある。

「神の義は福音のうちに現れ」

というのもそれなんだ。旧約の義とは違うですよ、この義は。旧約的な義ではない。垂直に神の生命が光が入ってきている世界が義なんです。「義」ということに躓いては困る。その内容は同時に「愛」なんです。義と愛は離すことができない。そして、その愛だけが本当の生命を持っている。その義だけが本当の光を持っている。

もうはっきりしているんだ。パウロは、

「聖霊を受けしか？」

と言っている。そして、パウロが按手すれば、異言が出て預言をする。そうすると今度は、或る人たちは、

「異言が出て預言をしなければ、聖霊を受けたことにならない」

と、また、そういうようにとる。そんなことにこだわる必要はないですから。

私が今日、言いたかったのは、私自身が長いことアポロ的信仰だった。何か欠けていることは、もう大分前から私は気づいてはいた。私の最初に書いた、20何才の時に書いた論文の、最初の「祈りの哲学」の最後に、聖霊のことを書いているんだ。びっくりした、自分で。

「最後は、聖霊がこなければダメだ」

というようなことを自分で書いている。そういう深い思索は私は始めっからしていたね。けれども、聖霊を受けたのは、それから10何年も後だ。不思議な導きだよな、私は。とにかく、不思議な導きで、来るべきところに来てしまった。

だから、この頃は毎晩、詩を書いていますよ、もう大体、2千何百行だ。1万2、3千行になるね。しかし、まだ10年はかかる。早すぎた。ゆっくり書く。いや、これからはゆっくりになるんです。なかなか大事な内容になってくるから。

そういうわけで、皆さんも今日はまた一つの大事なものをつかんだから、うれしいです。おわります。